

## 伝法灌頂胎藏界式伝授要意 元瑜編

布施 淨 慧

本編は前号に引き続き、幸心灌頂の後夜に当る胎藏式の行様を示す元瑜編の『伝授要意』（『智山全書』以下『智全』第九卷三九三頁以下）の文を訓下し、その元となる勝寛の『新撰式』（三卷式）の本文と対校し、註を施すものである。記述の様式は前稿に準ずる。

実修については、現今智積院道場で『三卷式』の伝統を重視しつつ、『智山法要便覧』第二集所説に従って勤修されている。今殊に後夜修法の現況について云えば、幸心灌頂は一夜式であったという行われ方を今に伝えるため、化主猊下開壇のとき一夜式の規模で行う。初夜灌頂が終了すると、内道場の莊嚴は直ちに後夜道場莊嚴と荘り変える。

先ず大壇においては敷曼荼羅は今までの金の敷曼荼羅の上に胎藏曼荼羅を重ね、壇線は今までのを用いて四楹に下纏に巻き替え、五瓶、大佛供の色次第は胎藏（白赤黄青黒）に従い置く。中瓶（白造花）は曼荼羅大日と宝幢の間に、輪は無量寿と般若との間に置く。脇机には初夜と同様佛布施を置き、四面器は胎の水を用いて盛り替える。小壇所は初夜と大阿・受者の座が異なる。従つて東座の両側に脇机を置き、六器は西方に荘りおく。また祖师壇は香花のみ盛り替えるのみである。（詳細は同書一七六頁の後夜道場莊嚴図参照）金胎を同じ壇いちだんがまえを用いるので、これを一壇いちだんがまえ構かまえといい、

現在は講堂中央の間内陣の壇を用い勤修している。

二会以下は講堂西の間を初夜道場、同じく東の間を後夜道場と定め、別壇で順次行ない、多数の勤修者に対応している。

**先ず大阿闍梨入堂し、礼盤に着す。**

内道場莊嚴等の事、別記の如し。是の故に煩しくこれを記せず。

後夜時尅の事。『<sup>1</sup>治承記』にいわく。「卯一點にて式衆皆參堂著座す」是れ則ち『<sup>2</sup>日疏』第四七張「食前に息災を作すべし」という意なり。式衆參堂の由、教授は大阿を案内す。大阿は初夜の如く後戸より參堂す。(但し入堂の時、胎藏界の式を懐中せしむるは当流の例なりと。

蓋し後朝に付属の作法ある故に、用うるに付属の衣体を着し、或はまた初夜の如く平袈裟を着し、付属の袈裟は廣蓋様の物に入りて儲け置き、朝に臨んでこれを与うるか。

若し<sup>3</sup>両壇構なれば、金界の壇に向かい、一礼し、次に東壇に臨んで三礼す。但し五古、扇を香呂箱に入れ、香呂を取り三礼す。(一説には五古を持ち添えて即三礼、登壇して脇机に置くと。此れ今時の様なり)

註1 『治承記』 勝賢撰 正藏<sup>78</sup>四二〇c

註2 『日疏』 大日経疏を略し、本書にはこの略名を用いる。法時の相应時を三時に分け 息災は食前、増益は暮間、降伏は夜間

を明す。(正藏<sup>39</sup>六一八a)

註3 両壇構 一つの道場に金剛界壇を西方に、胎藏壇を東方に構えることをいう。

### 次に供養法例の如し

<sup>1</sup>次に着座普礼已下 常の如し

次に神分等これを用いず。金二丁打って直ちに九方便を修す。

次に勧請(常の如し。但し入句別に異なる故にこれを出す。

護持受者成悉地 滅罪生善除障難

消除無明妄三業 顯得薩埵心月輪

決定不退三密行 自他円満無上覺

右の六句『<sup>2</sup>治承記』の裏付に、「報恩院の仰せを以って私にこれを註し了る」と。若しこの意に依れば、報恩院には句を減ぜず用い来ると見たり。

然るに洞泉のいわく、「<sup>3</sup>降臨の句の次に 護持受者除障難、滅罪生善成悉地の句を加う當流には、消除無明妄三業、顯得薩埵心月輪を誦せざるなり。其の所以は彼の二句は初台後金の時これを用う。今は初夜に無明を断じて心月を見る故にこれを誦えず」と。(已上胎藏界口決)

議していわく。若し実深の『灌頂記』並びに頼瑜、教舜の式、『文永記』『瑜伽傳燈抄』に依れば専ら消除無明等の

加句あり。これらは皆これ初金後台の傳なれども、この加句を憚らず。若し余れば洞泉の説は後人才覚の為此を加うるや。

且つまたこの消除無明等の後の四句の文は、『<sup>4</sup>阿闍梨准頂儀軌』の後批に出す。是れ恐くは祖師相承の入句ならんか。

次に五誓願（五誓願了って「護持受者成所願」の送句、阿闍梨心念にこれ唱う。

五古を香呂箱にこれを置く。

次に<sup>5</sup>前讚

次に普供養（転明妃）三力（金一丁）

次に珠を置き行法に入る。（職衆佛眼の呪を念す。但し心念にして音に出さざるなり）

次に振鈴（職衆これより已後、心念に當界の大日の呪を誦するなり）

振鈴以後暫くあつて教授師座を起つて堂内に入り便宜の処に催す。或る口伝にいわく。「振鈴後早く座を起つは然るべからず。大阿闍梨振鈴後に消々所作あるに由るが故に、早く座を起つ人は口伝沙汰の無き者かと」此の伝尤も指南とすべし。

大阿字輪観、本尊加持、佛母加持畢つて聊か念珠を摺つて礼盤を降りて平座に著す。散念誦これを満す。時に教授承仕を召して礼盤様の物を徹すること初夜の時の如し。

註1 着座普礼已下 常の如し

常の如しとは胎藏界念誦次第の行法を勤修することを意味し、着座普礼より始めて中間作法に至るまでの次第をいう。式には次第作法は略し、正念誦終了以後の所作を示す。本書には常の如しとあるが、神分、勸請、五誓願、前讚、普供養三力、大金剛輪以下の次第振鈴、立座、散念誦の各項目を掲げ、若干の留意すべきことを述べている。

註2 『治承記』勝賢撰 治承三年四月十二日勤修の記。この六句を明すに、次勸請（消除無明等の句あり）

裏書として六句を上げる。但し、護持の句「成悉地」のところ「除不障」と並記し、滅罪の句の「除障難」は「成悉地」一本には「成所願」の文言あることを明す。更に決定の句「三密行」は「菩薩行」とし、最後に「天下法界同利益」を加え書している。（正藏⑦⑧四二〇c）

註3 降臨の句。勸請の文第八の「降臨壇場受妙供」を指す。

註4 『阿闍梨灌頂儀軌』正藏⑮一九二b

註5 前讚 胎の前讚は、四智梵語、心略梵語、西方讚。讚所に於いて職衆これを唱う。

次正念誦畢つて（教授）坐を起つて、五瓶を一々に取つて各三逆壇を廻つて即ち小壇の机に置く。本方に違せず。中瓶は中央に置く。丑寅の角の瓶は東に置き、辰巳の瓶は南に置き、未申の瓶は西に置き、戌亥の瓶は北に置く。皆花を抜いて各の本所に置く。

次に<sup>1</sup>教授五瓶行道（古來の一説に、阿闍梨の命を承り五瓶行道を始む。一説には大阿の命を承らずして行道を始む。今時は後説を用うるなり）

『<sup>2</sup>具緣品』第二にいわく。「四方の所成の瓶に衆の藥宝を盛り満じて、普賢と慈氏尊と及び除蓋障と除一切惡趣と

をもつて加持を作し、彼れ灌頂時においてまさに妙蓮の上に置くべし。(已上頌文) 但し中台の瓶はこれを示さず。然れども其の印真言の説処を勘えずんばあるべからず。

先ず外五貼印とは『<sup>3</sup>略出經』第二(左<sup>二十五</sup>)にいわく。「持誦の師一切の佛旨を承り、その五叉契をもつて想つて其の杵の中に置け。(中略)次に契を結ぶ法を説かん。先ず金剛縛し已つて忍願この度を立て、進力の度をもつて忍願の傍に於いて曲るる刃の如く豎に相去ること両の大麥許りせよ。また定と智との度と及び檀慧とをもつて両を相い合わせ立てて又股の如し。これを五金剛契と名づく」

又『<sup>4</sup>瑜祇經』上(六左)にいわく。「窣覩波の印を結び明を誦して四处に加之普賢三昧耶なり。進力を屈して鉤となし、檀慧と禪智とを合せよ。是れを彼の大印とも名づく」これまた五股を説く文なり。

真言は『<sup>5</sup>大日經』第三(右<sup>十張</sup>)にいわく。「爾の時毗盧遮那世尊、四魔を降伏し、六趣を解脱して一切智々を満足する金剛字句を説く。

のうまくさまだぼだなん あびらうんけん」

また『<sup>6</sup>菩提場經』第三(左<sup>十一</sup>)にいわく。

のうまくさらばぼだぼうぢさとばなん あびらうんけん

金智訳『<sup>7</sup>念誦結護』(左<sup>二十一</sup>)にいわく。「乃至光明輪の中に住して密言を誦す。いわく、<sup>8</sup>あびらうんけん」

次に普賢印真言は『<sup>9</sup>大日經』第五(右<sup>二十一</sup>)八印品の所説。謂く「復た定恵の手をもつて未敷華合掌になして、二虚空輪を建立して、しかして稍これを屈す。是れ如来の一切支分生の印なり。真言にいわく。

のうまくさまだぼだなん あんあくそわか

次に弥勒の印真言。<sup>10</sup> 同品にこれを説いていわく。「前の金剛合掌に同じく、智恵三昧の手をもって加持して、しかして自ら回転す。彼の真言にいわく。

のうまくさまんだぼだなん まかゆぎやゆぎに ゆけい じんばりけん じゃりけい そわか

次に除蓋障印言 『<sup>11</sup>大日経』第四(右<sup>十</sup>帳)にいわく。「また前印(虚心合掌)の如く、二水輪二地輪をもって屈して掌中に入れ、二風輪火輪相い合わせよ。是れ除一切蓋障の印なり。彼の真言にいわく。

のうまくさまんだぼだなん あさとば けいたびゆどぎやた たらん たらん らんらん そわか

次に除惡趣印真言。<sup>12</sup> 同品(左<sup>十三</sup>)にいわく。「前の如く(施無畏の印なり)智の手を舒べしかして上にこれを挙げよ。是れ除惡趣の印なり。彼の真言にいわく。

のうまくさまんだぼだなん どぼうさなん あびゆたらんじ さとば だどん そわか

註1 教授 式本文「次正念誦」の書き出し 右に朱書で「已下教授」とある。よつて本文中に(教授)と補った。

註2 『具緣品』こ、では「四方の」と記してあるが、正蔵本には「四宝」とある。大壇四方に莊嚴された瓶と解せられるが、「四宝」とするのが至當であろう。(正蔵<sup>18</sup>二二a)

註3 『略出経』これより以下は中瓶加持の印言についての考證である。中瓶を加持するに、當界大日の印言をもつてなすが、先ず外五牀印の本拠たる経証として『略出経』の文をあげている。(正蔵<sup>18</sup>二三七c)

註4 『瑜祇経』正蔵本に「誦明如四処」とある。本文は「四処に加し」とこれを読んでいる。更に検討すべきである。(正蔵<sup>18</sup>二五五c 参照)

註5 『大日経』 真言と機能を明す経証として引証したもの。(正蔵<sup>18</sup>二〇a)

註6 『菩提場経』 具名『菩提場所説一字頂輪王経』第三卷 密印品第八にこの真言をあげている。但し印は外五帖印とは別の「持金剛者印」を示している。

註7 『念誦結護』 具名『念誦結護法普通諸部』 毘盧遮那如来を念誦するに「仏念誦要記」に随つて観想文を抄記する中にこの文がある。(正蔵<sup>18</sup>九〇六b)

註8 あびらうんけん 押紙

この五字の真言は『大日経』第三(十<sup>右</sup>巻)にこれを説く。是れ則ち秘密の真言の故に秘して「あく」というか。此の旨真言の字註に去急呼というをもつて了知すべし。若しこの真言の字体「あく」の声ならば去といわず。既に去という。去は即ち去声ということなり。もつて知んぬ入声の「あく」字にあらず。其の上<sup>上</sup>に急呼という。故に寂靜の「あー」字修行点に非ざることを顕す字註の意なり。若しこの深旨を知らざれば、満足一切智々の幽旨を失うものか。

予古稀の年に至り始めてこの旨を覚悟す。是れ偏長生の一徳なるか。

文政八<sup>乙</sup> 西五月十五日 五半時これを覚悟す

註9 『大日経』 普賢菩薩印真言の本拠を明す。同経第五秘密八印品中の文。(正蔵<sup>18</sup>三七a)

註10 同品 註⑧の秘密八印品の中で、世尊迅疾持印明を示すこと。(正蔵<sup>18</sup>三七b)

註11 『大日経』 西方瓶除蓋障加持印言の経証として同経密印品の文を示す。(正蔵<sup>18</sup>二六b)

註12 同品 北方瓶除患趣の印言をもつて加持する経証(正蔵<sup>18</sup>二七b)

次に正面の戸開いて出居して香水を加持して新阿闍梨を召して塗香をもって手に塗らしめ香水を洒ぐ。門内に入って覆面をもってこれを覆うて告げていわく。

一切の諸の悪趣門を閉じて、能く清淨の五眼を開らかん。

三昧耶の印を結んで口に三摩耶薩怛鑊の明を授く。三返 即ち忍願二度を豎て針につくる。

次に壇前に引入して香象を越え過ぐ。香氣薰せしめよ。明にいわく。

のうまくさまんだぼだなん あく さらばたらはらちかてい たたぎやとうくしや

ぼうじしやりや はりほらぎや えいけいきそわか

次に受者壇前に立つて白花をもって其の針の上に埒む。师告げ曰ぶべし。

佛子今已に如来の眷属の中に入って、まさに如来一切の悉地を得べし。未入壇の者にこのことを説くこと莫れ。

其の罪重し。

次に即ちこの密語を授けていわく。

おん さんまやさとばん はらちしや ばざら こく

、誦し了つて花を投げしめよ。花の落る所に随つて其の尊を知る。

次に教授開戸し乃至<sup>一</sup>香象を越る等。

洞泉のいわく。「<sup>二</sup>象は東方阿閼の所乗。是れ菩提堅固の体なり。白色は淨菩提心、即ち是れ白淨信心の義。秘密神通の力有るが故に、一彈指の際に能く所詣に至る。大壇に向わず南方の灌頂智に至る義なり。

註1 香象 傍註

香象の事。金界の式の時、大師並びに智證の説を挙ぐるなり。「入壇抄」にいわく。「未だ本説を勧えず。只作法を伝うるのみ」

このことは拙著『金剛界伝授要意』の加註2及び3に、押紙と傍註で記録してある。(成仏研紀要 三十八号 二四頁参照)

註2 象 傍註 『略出経』一(行十六)云々

「象をもつて座となし、また宝部中において三種子字を想え」等の文がある。(正藏⑱二二七b)

次に覆面を脱がしめ了って告げていわく。

金剛薩埵 汝が身を摂受して速やかに悉地を成就して五種の眼を開らん

<sup>1</sup>運動のいわく。「次に大阿闍梨、受者東西に相向って立って式文を読む」性善のいわく。「此の義しからず。只元の如く曼荼羅に対して読み聴かす。」

註1 運動 醍醐山安養院の住侶、報恩院法務寛順に法を受く。洞泉性善の法兄なりと密辞に解説がある。但し生貫寂年等未詳と

なっているが、梅尾師著『秘密事相の研究』の灌頂に関する聖教の項目中に、運動の『灌頂伝聞記』をあげ一七二〇年頃(享保年間)の人と推定している。

次に投ぐるところの花を取って真言を誦す。いわく。

おん はらちきりかんだ たらけいまん さとば まかばら

誦じ了って取るところの花を、彼の受者の頂に安ずること三度。

想え 大力の菩薩 我が身を摂受すと

次に受者をして護身せしめよ。

次に四礼させしむ（四つ乍金剛掌、明は<sup>不明</sup>□礼常の如し）

此の<sup>1</sup>四礼の印明は、『<sup>2</sup>教王経』第三大曼荼羅廣大儀軌品の所説なり。また『<sup>3</sup>略出経』第一（七<sup>右</sup>）『<sup>4</sup>蓮花部心軌』  
（<sup>左</sup>初帳）但し『教王経』は此の四礼の次に受者引入の義あり。且く其の異様を示さんが為に文を出さば、いわく、「<sup>5</sup>則ち<sup>あかのい</sup>緋繒をもつて角絡め披つて緋帛をもつて面を覆う。弟子をして薩埵金剛の印を結ばしめ、この心をもつて三摩耶サ  
ト鏤。

註1 四礼の真言 阿闍、宝生、無量寿、不空成就の四如来の真言。

阿闍佛

おんさらばたたぎやた ほじゅはさたのうや たまん になりやたやみ さらばたたぎやた ばざらざとば ちしゆた そ

ばまん うん

宝生佛

おんさらばたたぎやた ほじゃびせいきゃや たまなんにりやたやみ さらばたたぎやた ばざらあらたんのう びしん

じゃまん たらく

無量寿佛

おんさらばたたぎやた ほじゃはらばりたのうや たまなんにりやたやみ さらばたたぎやた ばざらたらまはらばりたや  
まん きりく

不空成就佛

おんさらばたたぎやた ほじゃきゃらまに あたまなんにりやたやみ さらばたたぎやた ばざらきゃらま くらまん あく  
以上四佛明は金剛合掌して誦ずる。

註2 『教王經』 不空訳 『金剛頂一切如来真実撰大乘現證大教王經』 卷下 正蔵⑱二一七b以下

註3 『略出經』 正蔵⑱二二五b

註4 『蓮花部心軌』 正蔵⑱三三二b

註5 註2の四佛真言を明した後の文 正蔵⑱二一八a

次に受者を引いて小壇の前に到る。左の足に花門を踏み 右足に花台を踏む。台上に坐せしむ。大阿闍梨東の座に着し、新阿闍梨西の座に着す。

<sup>1</sup>次に大阿闍梨等

受者護身、四礼の間、大阿闍梨<sup>2</sup>良の角より小壇処に入り（花台を踏むは金界の如し）東の座に着す。先ず念珠を置いて次に秘密宮より散杖を出し、左の手に五支を取り、右の手にて次での如く五瓶に差す。謂く中、東、南、西、

北其の次第なり。

次に新阿闍梨西座に着す。教授受者を引いて巽の角より小壇に入り、花門花台を踏むこと文の如し。受者西の座に着す。

註1 ここに朱書にて「已上教授」とあつて教授の所作中心の記述であつた。これより小壇処の所作は大阿の所作となるので、この標題が設けられている。

註2 良の角 明障子で囲まれた小壇処は、大阿と受者の出入口を別けて二箇所ある。良は東北の入口のこと。因みに金界のときは巽(南東)が大阿の入口である。尚金界のことについては、成仏研「研究紀要」三十九号一二頁の註を参照。

### 次に吉慶の讚を唱う(催すべし) 1

註1 この標題の下には『要意』の解説文は無い。金界において既述したので略したと思われる。前出成仏研「研究紀要」三十九号一三頁以降を参照。

次に五瓶の水をもって次第に受者の頂に洒ぐ。(中よりこれを始む。「うん」をもって加持す)

遍照尊 金剛外縛にして忍願直く立て、上の節を屈し進力を柱えて中指の背に着く。頂に置け、真言にいわく。

おん さらばたたぎやたい じんばりや びせいぎや うん

阿闍佛 金剛縛にして忍願を竖て針の如し。額に當て明にいわく。

おん ばざらさとば びしんじやまん うん

宝生佛 金剛縛して忍願屈して宝形の如くして、頂の右に當てよ。明にいわく。

おん ばざらあらたんのう びしんじやまん たらく

無量寿佛 金剛縛にして忍願少し舒べて蓮葉の如くして、頂の後に當てよ。明にいわく

おん ばざらはんどま びしんじやまん きりく

不空尊 金剛縛にして忍願を掌に入れて面を合せ、壇惠禅智各相柱う。頂の左に置け 明にいわく

おん ばざらさやらま びしんじやまん あく

但し、先ず五肱をもつて受者の頂を加持す。即ち「ア、アー、アン、アク、アーク」の五字を用う。是れ『1治承記』の口伝、當流はこの伝に依る故に、「うん」字の加持を用いざるなり。但し式文の如く「うん」字の加持を用うるは、成賢の口伝（実深の記六の如し）『具支式』（金界の式）の裏付にいわく。「五肱をもつて首を加持し、三度瓶水を散ず」<sup>2</sup>

#### 遍照尊等

初夜の如く<sup>3</sup>若し<sup>4</sup>小野僧正の説に依らば、受者印を結び、阿闍梨言を誦じて受者の頂を洒ぐ。若し『5治承記』に依れば、この五佛灌頂の印明は阿闍梨これを結誦す。洞泉のいわく、「この五佛灌頂は大阿自ら加持す。運助僧正受者を加持するなり。この義しからず。受者は自別に加持するなり」と。愚意謂らく。式文の面は小野僧正の説の如きか。権僧正の意も四隅の瓶をば四佛に約する故に、今其の印真言を出してその要意を示すか。若し今時の行用の如くならば、権僧正瓶水を受者に洒ぐ時の真言を挙げ玉わざる其の由緒何ん。

まさに知るべし。幸心流の古の記に小野僧正の説の如く作法するは、尤も由るか。教舜の『金剛界口伝抄』にいわく。「今五佛の智水をもって新佛の頂に洒ぐ。即ち灌頂儀式なり。故に遍照尊の印をば宝冠印と習うなり。仰は即ち宝冠形なり。輪王に即位には冠をもって先となす。今五佛灌頂もまた是の如し。五佛の宝冠を授けて依報の莊嚴を成ずるなり」(已上憲深の御口説) 若し今時の作法に依るは『治承記』等の如し。

註1 『治承記』の口伝 五阿の明を用いること、同記初後夜の作法に記述無し。不審。

註2 傍註 金剛界をもって先となすも両部一雙なり。台藏界を先とするも、先ず五佛灌頂の印明をもってす。其の印明金界に同じ。もって知んぬ。成佛の軌則は先ず金界に在ることを。

註3 傍註 幸心流の記は此の説による。

註4 小野僧正 傍註 六帖大灌頂法に出ず。即ち、「先ず弟子をして大日印を結ばしめ、中胎瓶正覚心真言を誦じ、これを灌ぐ」以下四佛瓶水を普賢、文殊、慈氏、観音の真言を誦じて瓶水を受者の頂に洒ぐとある。(以下『大灌頂作法次第』正藏<sup>⑧</sup>八〇c)

註5 『治承記』 五瓶の水をもって次第に受者の頂に洒ぐことについては、「小野僧正いわく。水を受者の頂に洒ぐ時受者は各印を結び、阿闍梨は其の明を誦じてこれを洒ぐ」とある。(正藏<sup>⑧</sup>四二〇a)

### 次に宝冠を披せしむ 不動真言

#### 次に宝冠

『治承記口訣』にいわく。「醍醐の方には紙をば厚くこれを張る。其の上に絵これを書く。綵色の次第別に在り。

金界の式には辟釧を出すと雖も、今これを挙げざるは、両界共に辟釧を用いざるの證なり。

次四佛加持 常の如し 受者なすべし

次に四佛加持

次五佛灌頂 常の如し

次に五佛灌頂

次四佛繫鬘 常の如し

次四佛繫鬘

註1 四佛加持、五佛灌頂、四佛繫鬘の三項目についての要意の解説文無し。

次に想え 新阿闍梨大日尊となる。頂上に「あん」字あり。心中に「あ」字あり。具に百光遍照の如し

次に結定印（式の如し）

『幸心古記』にいわく。「次に1定印を結び、想え。新阿闍梨の頂上に「あ」字あり。心中満月輪の中に「あ」字あり。変じて宝珠となる。宝珠轉じて大日如来となる。百光遍照塵数三昧の諸佛菩薩圍繞し下えり」

此の観想種三尊轉成の様なり。式文は略か。

註1 定印 傍註 法界定印

次に如来身会の三十余印、真言を行ずべし。但し一々に想うべし。受者に備えせしむと。

『1治承記』裏付にいわく。「大惠刀より平等開悟に至る二十五箇の印明、是れ如来身会と名づくるなり。或いは入佛三昧耶より慈氏菩薩まで成身会に准ず云々。『薄紙次第』にこれを出すと」

『2作礼方便』の次第に、「慈氏菩薩真言已上を成身会に準ず」という故に如来身会というか。『式文』の意に依れば、阿闍梨三十七尊の印言を結誦し、受者にこれを備えせしむる義なり。

今時は受者をしてこれを結誦せしむる義なり。朱書に、或いは受者これを作すべしという故なり。

註1 『治承記』 正蔵⑧四二二 b

現行の幸心小壇所作法には欠して作法は無い。如来身会は当流広次第にて修するところであるが、こゝに示された印明を結誦する功德は如来の三密を具足することである。『密辞』には、「一説には此の印言は灌頂小壇の時にも結誦するが故に、如来とは法身如来なりといい、一説には舌語牙等の身語の行相より推して変化身なり」という」と解説する。因みに二十五印明とは次記のとおりである。

大恵刀 大法螺 蓮華座 金剛大恵 如来頂 如来頂相 毫相蔵 大鉢 施無畏 與満願 悲生眼 如来素 如来心 如来脐 如来腰 如来蔵 普光 如来甲 如来舌 如来語 如来牙 如来弁説 如来持十力 如来念処 一切法平等開悟

註2 『作礼方便』 弘大全②四〇五

次に白拂をもって受者の身を拂え。

次に扇をもって受者の身並びに四辺を扇ぐ。

次に塗香をもって受者の胸に塗る。

次に五古をもって偈並びに明を誦す。受者の両手に授く。頌にいわく。

諸佛の金剛灌頂の儀をもって 汝已に如法に灌頂し竟る 如来の体性を成んが為の故に 汝にまさに此の金剛杵を授くべし

密明にいわく

おん ばざら ちはちだとは びしんじゃみ ちしゆた ばざらさんまや さとばん

次に金剛杵を取り収め、弟子の本名の上に金剛の字を加えてこれと呼ぶ。此の真言を誦じていわく。

おん ばざらさとば びじんじゃみ ばざらのうまく びしきてい けい ばざらのうまく

次に金籠をもって両眼を拂え。「らん」字をもって金籠を加持す。また「らん」字を觀じ兩眼の中において無智の膜を淨む。偈にいわく。

佛子、佛は汝が為に 無智の膜を決除すること 猶し世の医王の如し 善く金籠を用ゆ 汝金剛の眼を開らいて 法の実相を見ることを得ん

次に「鏡」を授けて「まん」字を見せしむ。明鏡を加持す。また「まん」字を心上に觀じて妄執の垢を除く。告げていわく。

一切の諸法の性は 垢淨不可得なり 実に非らずまた虚にあらず 皆因縁より現ず まさに知るべし諸法は 自性所依無しと 汝は今眞の佛子なり まさに廣く衆生を利すべし

<sup>3</sup> 師弟子においてまさに恭敬を生ずべし。此の人能く諸佛の種を紹ぐが故に  
次に輪をもって受者の跣の上に置く。(二足の間)「うん」字をもって金輪を加持す

次商法をもって右の手に授く。「あ」字をもって法螺を加持す。偈にいわく。

汝今より以後 諸佛の法輪を転ず 無上の法螺を吹いて 心を一切処に遍せしめよ まさに疑悔の心を離れて 勝行の道を開示して 一切時処に於いて よく諸佛の恩を報ずべし

已上初夜の作法に准じて知んぬべし。『具支式』には一一、八種の道具を授くる作法を、初夜作法に准ぜしむる意か

註1 鏡 傍註 『疏』九(四)の意は、鏡をもって十喻の中の鏡像を觀に約す。

こ、にいう十喻の中とは、十縁生句第四の影の觀想を指す。初夜の作法では八種道具授与の最後に授けた。後夜の最後は商法となる。

註2 「まん」 以下に出す種子の表記は全て梵字にて示されている。

註3 押紙 一行の文、実深の記に受者供養の文という。この式に於いては何んか意を得玉うべしや。次にいまだ輪、法螺の説了らざるに、已前受者供養の文を加え玉う。權僧正の本懷量り難し。殊更金界の式と明鏡等の列次異なる故に、受者供養の文と雖見えざるなり。若ししからば今此の文は明鏡の説に就く頌文うたなる故に、金台一双に明鏡の下にこの頌文を挙げ玉うなり。但しいまだ其の深旨を聞かざる故に明師に尋ぬべきか。

『具支式』は一一、八種の道具を授けず筈に入れ乍らこれを授く。この旨三密房の式の中に權僧正の説を挙げ云々

次に大阿闍梨白傘蓋を執つて受者の頂に覆うて三逆大壇を繞る。即ち壇前に留つて佛を礼せしむ。其の蓋身に隨つて上下せよ

次に曼荼羅の前に立對むかて為に三摩耶を説く。

佛子汝今已に阿闍梨位を成就し竟ぬ。諸佛並びに金剛薩埵等の諸の眞言主 一切の天神護法既に共に佛子を知り給いぬ。

次に1立つて、曼荼羅むかに對て、為に三摩耶を説く。

註1 立って 傍註 受者

註2 為に 傍註 阿闍梨

次に共に還つて小壇所に着す。先ず新阿闍梨をして東の座に着け 即ち大阿闍梨諸尊に白さく。

今某等に灌頂を与え竟んぬ。諸尊に付属して明藏を持たしむ。

この語をなし已つてまさに傘蓋を放つべし。

1次に白傘蓋を放つ

『<sup>2</sup>治承記』にいわく。「共に小壇所に還つて着し、先ず新阿闍梨をして東の座に着せしむ。」

註1 傍註 今時の行様は小壇所屏風外に在つて式文を読む。

註2 『治承記』正藏⑧四二二 b

**次大阿闍梨西の座に着く（私にいわく、讚これを催すべし）**

次に大阿闍梨西の座に着すと

実深記にいわく。「師口にいわく「座定り了つて後讚を催す」古慶梵語三段。この梵語の讚は、『<sup>1</sup>御請来録』(右七)に、

梵字吉慶讚一卷と云々。これなり<sup>2</sup>

註1 『御請来録』 弘大全①八十八

註2 傍註 予これを秘藏す。

『入壇抄』に受者供養 小壇に入つて着座して程無くこれあり。吉慶の漢語も受者供養隨一なり。醍醐様と大いなる相違なり。

次に閻伽の印真言を行じて閻伽香水を供ず

『幸心古記』にいわく。「受者定印を結んで供養を受くべし」

已下の作法は金界に准ずと知るべし。但し加持の印言は、不動釵印に「かん かん かん」三遍をもつて加持すべし。

次に五供の印言を行じて、塗香、花、焚香、飲食、燈明を供ず。種々の花香をもつて供養することは、此の受者佛

位に坐するが故に云

次に大阿闍梨念珠を取つて、胎藏の大日の真言を誦す

次に大阿闍梨念誦等

「あびらうんけん」百八反誦じ了って珠を摺り、受者の悉地を祈誓す。

### 次に後供を行はずべし

次に後供を行す

前供養の如し。

### 次に道具を授く。

洞泉のいわく。「上古は此の処において五古、宝冠等の御道具を付属す。今時はこの儀無し。『具支灌頂聞書』（勸修寺）にいわく。<sup>2</sup>これ印璽の為箱に入れながら一度に道具を授くなり」権僧正の義も『具支式』を写す故に次に道具を授くというなり。

註1 『具支灌頂聞書』 この本筆者未見であるが、『具支灌頂式』を見るに確かに「道具を授く」の標題はある。（正藏<sup>78</sup>七一b）  
註2 傍註

<sup>(元)</sup>玄瑜謂く。三密房相承の両壇の式に、権僧正の口傳を載す。いわく。師のいわく「胎藏の時、理具の印を結んで道具を授けず。只印璽として管に入れながら一度に道具を授くるなり」と。

今此の式は一付すと雖、これを授与す。古式に准じて印璽としてこれを授くならんか。口伝を聞くべきなり。

次に殊に五牀を授く。(或は独古を授く)

大阿闍梨杵を執つて明並びに偈を誦じこれを授与す。告げていわく。(但弟子この杵を受け頂上に安ず)

此の金剛杵は 諸佛の体性なり 金剛薩埵の 手に執る所の者なり 汝禁戒を護つて常にまさに受持すべし。  
弟子受けたつてこの決定要誓の密語を授く。其れをしてこの密語を誦せしむ。

おんさらば たたぎやた しつちばざらさんまや ちしゅたえいさとは たらやみ ばざらまとは きまきまき  
うん

誦したつて弟子に告げていわく。

汝一切衆生において 常に慈愍哀矜(こころ)を生じ 示し誨(おし)て厭離(おし)を生ずること莫れ

また頌にいわく。

此等の三昧耶は 是れ諸佛の所説なり

守持して善く受護すること まさに身命を保つが如くすべし

次殊に五牀を授く等

洞泉和上のいわく。「この五牀は阿闍梨の持ち五牀なり。大阿右の手に五古を持ち(乳の方に当て、不堅平横たえずこれを持する)、先ず偈を誦していわく、「この金剛杵等」偈了つて杵を弟子に授け、この杵を受けて頂戴して頂上に

安ず。この時大阿この密語を授く。(口移しにこれを授く) 真言一反

おんさらば たゝぎやた。 しつちばざら。さんまやちしゆた。えいさとば。たらやみ。ばざらさとば。きざらき  
うん

(已上<sup>ななかえし</sup>七切にこれを授く)

また大阿告げていわく等(これまで受者杵を頂戴す) 偈了つて大阿杵を取つて便宜の処にこれを置く

玄瑜謂く。和上の所持の五古を授くるという説その道理あり。已に道具箱の五帖は箱に入れて付属し畢る故に、外に授くべき五古は無し。是の故に持ち五帖を授くべき道理なり。設い今時道具を授けずも古式の様を守るべし。故にかくの如く沙汰に及ぶか。

尚、持五古なるべき證文を出さば、『式』文の註に「或は独古を授く」故に、これに対する五帖なる故に式文の意を持ち五帖ならん。独古の如きは道具箱にこれ無き故に、阿闍梨所持の独帖必定なり。

今時道具箱の五帖を授くるは、恐らくは古代の様を失するか。

またこの五帖を授くることの様は『略出經』(第四の二十二右)の意なり。但し彼の經は長行にして、偈頌に非ず。式は五字句の頌文に結ぶか。

またこの密語、数本の式を対校するに、「えいさとば」の下に恐らくは「かん」字を脱するか。經文にはこれあり。但し、『灌頂儀軌』は諸式の如く「かん」の字無し。尚異本をもつて校すべきのみ

また『具支式』は「諸佛金剛灌頂儀」等の頌文を授くるのみにして真言を授けず。『具支聞書』に依らば、金界の時に五古を授けず、台界の時に最後に五古を授くるは、阿部惣合の五智をもつて新阿闍梨に付属するなりと この説

他流の口伝なりと雖も、甚だもつて興あり、興あり。

註1 七切 真言を七つに割って唱えること。出す真言の句七つの右下に○印を付してこれを示している。

七切について傍註に『十訓抄』十一（十二左）の説明文が記してあるが読解出来ず。

註2 『略出經』 頌の基となる長文とは、また五股金剛杵を執りこれを授与して告げて言く。

此れは是れ諸佛の体性。金剛薩埵手に執る所の者なり。汝まさに堅く禁戒を護つて常に畜えこれを持すべし。（正蔵<sup>18</sup>二五二b）

註3 經文『略出經』第四に挙げ明には「かん」字を示す。（正蔵<sup>18</sup>二五二b）

註4 『具支式』の胎藏界次第中には、次殊に五股を授く、偈にいわく

諸佛金剛灌頂儀 汝已如法灌頂竟

為成如来体性故 汝応受此金剛杵

と記すのみである。（正蔵<sup>18</sup>七一b）

誦じ了つて告げていわく等

此れは<sup>1</sup>經に教誡を説く中の文なり。

又頌にいわく等

此れは三昧耶を明す偈頌なり。

「<sup>2</sup>受」字經文並びに儀軌には愛の字に作る。また一本の式にも愛に作る。議していわく。恐くは愛の字本是か。能く

次の句に応ず。

註1 經 『略出經』第四の文を指す。(正藏<sup>18</sup>二五二b)

註2 受 式文には「愛護」とあり、傍に「受イ」と留意している。「略出經」にも「愛護」とある。「次の句」とは結句の「當如保身命」を指す。

次に受者此の如くの教えを受けて師足を頂礼して言して白さく。大師の教の如く我れ誓って修行して佛恩及び大師の恩を報し奉らん。敢えて師の命に背かさらん。また教理に違せざらん 云々

次に受者此の如き等

始より修行に至るば『略出經』の意。佛恩に報じ奉らんの下は經軌に見えず。教舜の式の裏付にいわく。「師口にいわく。此の一段は受者に教えて誦せしむべしと雖も、近來其の儀無し。只大阿密々にこれを読むか」  
実深の記にいわく。「師口にいわく。頂礼師足」これを略す」

次印信 この時に有るべし。(然して密印を授くべし。外五)

然して密印を授くべし 外五

外五拈印、あびらうんけん(三反 口から授く)

1 教舜のいわく。「外五牘の印に、五字の明これを授く。胎の灌頂究極なり。能々これを思え

註1 教舜 『伝法灌頂私記』卷下 後夜作法（正藏⑧七六六c）

**灌頂を授与すること竟ぬ。佛子佛位に昇れり。皆諸尊及び三密の明藏を付属す。**

授与灌頂竟等

此の偈頌音に読むこと元祖の口伝なり。是の故に『古式』に訓点無し。然るに近世流布の式多くは訓を読む。後人の不覚か。洞泉和上のいわく。「此の偈読み聞かせ了つていわく。三国の祖师万里の波涛を凌いで苦勞を顧みず往来し給うは、只両部伝法印明伝授せんが為なり。能々懇重の信心をもつて朝夕に結誦すべきなり」

**次に宝冠を脱ぐべし。**

次に宝冠を脱ぐべし。

宝冠を収め了つて笄の緒を結んで、师弟共に小壇を出るなり。

（小壇所道具のこと。若し幸心相承の秘密道具に依れば、『1瑜伽伝燈抄』の第三にいわく、小壇所道具

朱の小唐櫃 一合 九種道具これを納む

宝冠 一 臂訓 二 白拂 一支

金篋 一支 明鏡 一面 輪 一

商佉 一 团扇 一本 五古 一

塗香器 一 私にいわく、片供器に似たり。已上九種道具、當流嫡々の外者、その体を弁せず、悉く其の深意相承  
これあり。

辟訓は九種の外なり。随つて当時はこれを用いず。云々

註1 『瑜伽傳燈抄』 仏書解説辞典に依れば、十卷、足利時代の写本が大谷大に所蔵とある。著者名の記述なし。探索の要を思ふ。

### 次讚の声止む

実深の記にいわく。「师口にいわく。これを止めず、誦し畢るをもつて限とす<sup>1</sup>」

註1 止讚 傍註 三密房所伝の式に、止めざれば誦よという故に、往古はこれを誦す。是の故に今は讚の声を止むなり

次に受者堂内の座に着す

师弟共に小壇を出る時、教授赤蓋を大阿に進め、大阿これを取り受者に覆い、先ず大壇の前にて三礼（合掌 起居 礼）。次に祖師礼。蓋を教授に賜う。教授受者を覆うて列祖を礼せしむ。

已下初夜の作法に准じて知んぬべし。但し祖師礼畢つて受者を引いて合香所に入れ、所持物を与え後堂に着せしむ。

次に大阿闍梨大壇に返り着して後供を献ず。以後の作法例の如し

教授小壇の五瓶を大壇に移す等初夜の如し、大阿礼盤に還着して以後の作法初夜に准じて知ぬべし。

佛布施を献じて後、結願作法あり。別記の如し。但し、神分、祈願等の金は音低くこれを打ち、終りの三部の金三丁は引き続きて少し音を高く、終りの一丁は別して高く打ち切るなり。此の打切の音を聞いて後讀発音なり。

南無阿里耶の句三反するに、近世初二三重に唱え来たれり。其の由緒知り難し。愚推義していわく。不動尊は両部通じて弁事し給う中に、別して台界は彼の尊の諸事を弁於し給う故に、其の報恩遮徳マの為に殊更にこの事あるか。尚明師に尋ぬべし。

後夜偈（先ず金一丁）。次に発音。當流は「白衆等各念」の五字を頭となす。「此時清浄」已下助音なり。

次廻向方便 已下の作法は初夜に准じて知るべし。

次に袈裟を脱いで受者に授けて着せしむ。其の本の袈裟をもつて大阿闍梨着す<sup>もと</sup>。但し便宜に随うべし。一函に非ざるのみ

『具支式』及び權僧正の式文には教誡の儀無し。是の故に袈裟付属の旨を述ぶるのみ。

但し、元祖の教誡の詞これあるより知んぬ。古来より相承し來ること久し。故に『治承記』にいわく。「大阿闍梨の御袈裟を教授師これを脱がしめ、受者に着けしめ了る。<sup>2</sup>乗遍参向して受者の袈裟をこれを脱がしめ、大阿闍梨に代り着せしめ畢る。

次に大阿闍梨受者を相具して種々教誡。五牒を授く。

教誡の詞、頼瑜の式文の終りに挙るところ元祖憲深の作なり。『瑜伽傳燈抄』第八に、憲深自筆の折紙を写すと全同の故に、尤も信用すべし。但し略説に依れば、教誡の詞を用うべし。彼の文にいわく。「生々に佛恩を報じ、世々に師徳に酬い、敢て師命を背かず教理に違せず、修学をもつて光となすべし」の由これを教誡するなり。

また洞泉和上のいわく。「師告げていわく。此の秘密伝法の軌則は、両部内證の肝心なり。しかるに今般當日後朝共晴天にて、無難に成就のこと冥加の至りなり。然れば佛恩法恩及び師恩を報ぜんが為に、興隆密教修学是れ專要なり。努々<sup>ゆめめ</sup>忽請すること勿れ」

註1 『治承記』正蔵⑧四二二c

註2 乗遍 治承三年四月十二日は行われた灌頂の職衆の讚衆の一人として乗遍大法師の名が記されている。出自等不詳（正蔵⑧

<sup>1</sup>次に新阿闍梨付属の袈裟を着す

五帖念珠を持って列祖一礼宛これを拝す。但し大阿は跡より拝む可きなり。

若しまた大阿初めより平袈裟を着せば、教誡の時、先ず袈裟、五帖、念珠次第して悉く付属す。教授取り次いで  
一一頂戴せしむ。

或はまた一向甲乙の受者の時は、五古と念珠と計り付属して袈裟の付属に及ばざるなり。

註1 この一項の標題は式文になく、敢て玄瑜は付属の仕方を述べんが為こゝに設けたものと思われる。

次に赤傘蓋をもって新阿闍梨の上に覆つて八大師を巡礼し、了つて出堂。輿こに乗る儀式は大阿闍梨入堂の儀式の如し云々

汝無等の利を獲て 位大我<sup>1</sup>の同じぬ

一切の諸の如来 此の教の菩薩衆

皆已に汝を摂受して 大事を成弁す

汝等明日において まさに大乘の法を得べし

三宝院 権僧正御作なり

次赤傘蓋をもつて新阿を覆い等

新阿闍梨付属の袈裟を掛け、五肘念珠を持して列祖各一礼宛これを拝す。大阿跡より合堂三礼す。列祖皆しかなり。乗輿儀式等

此れは還列の儀式なり。

汝無等の利を獲て等

洞泉のいわく。「此の文は三摩耶戒の式にあるべきなり。彼にこれ無き故に此の処に書き給うや」と。

註1 原文は「の」であるが、文意を伺えば「に」と思われる。